上海日本人学校虹橋校における運動会の運営と「日中友好」の取り組み

前上海日本人学校虹橋校　教諭
茨城大学教育学部附属小学校　教諭　野　村　知　弘

キーワード：運動会、特別活動、国際理解教育、日中友好、上海

１．はじめに

上海は中国経済の中心都市であり、日系企業も数多く進出している。在留邦人（旅行者や出張者などを除く３カ月以上の滞在者）の数は、2014年10月時点で約43,000人となっている。２年連続で減少しているものの、上海が今もなお日本人の多く住む都市であることに変わりはない。

上海日本人学校は、校舎が市内の２つの地区に分かれており、両校とも大規模校である。私の赴任した虹橋校は、小学部のみであるが、1400人を超える児童が在籍しており、47学級を有している（2014年）。

３年間の派遣期間中、日本でも中国関連のニュースが多く飛び交った。それらは、現地に住む日本人にとっては大きな問題であり、学校の活動にも影響が及んだ。どのような問題が起こり、子どもたちにどう影響したのか、そして、我々はどう対応したのか。その概略をここに紹介する。

２．在任期間中の主な出来事

(1) 反日デモ（2012年）

2012年、尖閣諸島の国有化を契機に中国各地で大規模な反日デモが起こった。学校は休校となり、我々は自宅待機して成り行きを見守ることとなった。上海では、総領事館周辺でデモが行われたり、日系の店がいくつか被害を受けたりしたものの、幸い大規模な暴動に発展することはなく平常の生活を取り戻した。しかし、学校の運営、特に学校行事は大きな影響を受けることとなった。

毎年行っていた中国の文化を体験する活動（チャレンジタイム）では、中国文化を紹介してくれる予定であった現地の団体からキャンセルがあり、その年度の活動は内容の変更が迫られた。現地校交流においても、前年度まで受け入れてくれていた学校から「今年はできない」との連絡を受け中止になった。

そして、最も影響を受けたのは学校最大の行事である運動会であった。運動会の予定は９月下旬。しかし、９月18日は満州事変の発端となる柳条湖事件が起こった日であり、反日行動も心配されていた。このため、延期をしての平日開催という判断をし、なんとか開催はできたものの大幅な規模縮小となってしまった。

(2) 鳥インフルエンザの流行（2013年）

2013年４月、WHO（世界保健機関 World Health Organization）は中国で初めて鳥インフルエンザのヒトへの感染があったことを発表し、たいへんな騒ぎとなった。このことによって、社会科見学などの校外に出る活動は延期もしくは縮小となり、学習の進度に遅れが出た。

(3) PM2.5 大気汚染（2012年～）

2012年ころから問題となり始めた大気汚染は、普段の生活に加えて、学校での活動にも影響を及ぼした。学校では、数時間おきに汚染濃度をインターネットで確認し、高い値が認められた時には外での運動を禁止し、さらに高い値が出た時には、外に出ること自体を禁止とした。このことによって秋から冬にかけてはグラウンドでの体育の授業ができなくなることが増えた。休み時間に外遊びができなくなることもしばしばあり、児童が運動をする機会が極端に減少してしまった。

３．子どもたちの感じる中国・上海

上海で生活する子どもたち（当時担当していた３年生）に「中国や上海は好きか」と聞いてみたところ、「あまり好きではない」と否定的な答えが多く返ってきた。前述したように、この時期の日中関係は政治的に冷え込んでおり、加えて食品の安全や大気汚染のような問題も次々と表面化してきた。日本のメディアも中国のこのようなマイナスの面を取り上げて報道しており、その影響も大きかったと考える。また、保護者（特に母親）の中には自ら望んで日本を離れた方は少なく、不安定な情勢と慣れない生活への不満が子どもへ伝わっていることも考えられる。このように、上海で生活しているのにも関わらず、上海に対してマイナスの印象を持っている子が多いことが分かった。我々教員としては、このような子どもたちに、上海の良さにも目を向けてもらいたいという思いが募っていった。

４．日本人学校での取り組み

(1) 運動会

運動会は、多くの保護者や来賓を招いて行われる学校最大の行事である。私は、赴任２年目（平成25年度）に体育主任として運動会の計画・運営に携わる機会を得た。人数の問題、暑さの問題など、多くの問題を抱えながら準備を進めるのは困難だったが、たいへん貴重な経験となった。本項では、私が在籍していた３年間の運動会の内容や運営について述べると共に、国際理解教育（日中友好）の取り組みについても触れていくこととする。

①平成24年度運動会　テーマ「日中YOU GO（友好・融合）」

本校の運動会は、体育部だけでなく特別活動部も大きな役割を担って運営をしていく。特別活動部が年度初めに設定した学校の年間テーマが色濃く運動会にも反映されていくこととなる。

平成24年度は、日中国交正常化40周年の記念すべき年であり、学校としてもこれを盛り上げていこうという雰囲気があった。しかし、先述したように日中関係の悪化から、マスメディアで報道されているのは、お祝いムードとはほど遠い話題ばかりであった。そんな中、運動会が迫る学校では次のような気持ちで準備を進めていた。

それは、「今は両国が非難し合う風潮が続いているが、私たちは日中友好を貫こう」という決意だった。
学校には、多くの中国人スタッフが働いている。日本語が上手で通訳などでもお世話になった事務職員や、日本語は通じないがあいさつするといつも笑顔で返してくれる清掃スタッフ、私たちの「こんな物・教具があったらいいなあ」を想像以上の高品質で形にしてくれる製作スタッフ、さらには、週１回ある中国語の時間に児童に向けて中国の言葉や文化を教えてくれている中国語教師。どの中国人スタッフも私たち教員や子どもたちに優しく接してくれた。中国人スタッフのお陰で私たちが仕事できているということを強く感じていた。私たちには、直接ふれ合ってきたから感じる感謝の思いがあったからこそ「日中友好」を掲げていこうという気持ちになったのかもしれない。

平成24年度の運動会では、準備運動用にオリジナルのダンスを作った。全体練習の日、当時の体育主任が中国人スタッフに声をかけ、普段は室内で働いている方にも外に出てきてもらい、全員でダンスを踊った。清掃スタッフも中国語教師も子どもたちもみんな笑顔であった。外に向けて発信するわけでもない普段の練習の１コマに過ぎないが、日本人と中国人あわせて1600人以上で踊ったその光景は忘れられない。

手作りのペットボトル壁画

特別活動部を中心として、運動会に飾るための「ペットボトルキャップ壁画」の製作も運動会の練習と同時進行で行われていた。子どもたちが持ち寄った小さなペットボトルキャップを色ごとに仕分けし、巨大なキャンパスに置いていくという作業を全校児童で行った。できあがった壁画は校舎の２階に届く

高さになった。そこに書かれている文字は、もちろん「日中友好」である。

プログラムが縮小され、外部に目立たないように音響などにも気を遣って行った平成24年度の運動会。この時、日中のギクシャクした問題が世間を覆っていたが、虹橋校の中には、全力で「日中友好」のメッセージを掲げていた子どもたちと職員がいたことを記しておく。

②平成25年度運動会　テーマ「和」

この年の運動会は、テーマ性・ストーリー性をもった運動会にしていこうという考えのもと、準備を進めていった。テーマは「和」。学級、学年、全校で「輪」をつくり、みんなで仲良くつながっていこうという趣旨である。もちろん、中国人スタッフも交え、日本のよさと中国のよさを感じながら運動会をつくっていこうという気持ちも含んでいる。

本校では、数年前から縦割り班の活動を継続させてきた。海外という地であり、放課後に自由に遊びに出て行くこともできず、子どもたちの交流はかなり制限されている。縦割り班での活動は、上級生が下級生の面倒を見るなど、貴重な異学年交流の場となっている。通常は月に１・２回しか集まれないが、この運動会で縦割り班活動を活性化させ、年度後半の盛り上がりにつなげていこうという思いもあり、縦割り班種目である大玉運びを導入した。

また、本校では、毎年１体ずつ学校オリジナルのキャラクターを製作し、運動会に登場させている。子どもたちからの原案をもとに特別活動部が中心となって製作しているもので、この年は「やんちゃッキー」が誕生した。友達の輪の中になかなか入っていけないやんちゃッキーが、運動会の各種目で貯まる「和」のパワーで最後にはみんなと仲良くなるというストーリーを、特別活動主任と共に考案した。

さらに、運動会の練習時から「WAになっておどろう」を練習し、テーマソングとして活用した。運動会当日、全校で歌ったこの歌は、やんちゃッキーがみんなの仲間になるというストーリーと相まって、全校が一体感を感じられるものとなった。

運営では、数千人というお客さんを校内にどう招き入れるかという問題があった。グラウンドは児童だけでいっぱいになってしまい、お客さんを受け入れるには場所が足りない。加えて暑さの問題もあった。上海の夏は気温40度を超えることもあり、熱中症対策は避けて通れない。これらを解決する策として、前体育主任が考案したのは、体育館でライブ映像を流すという策だった。現地の写真店に協力をしてもらい、グラウンドで行われている様子をビデオカメラで撮影し、その様子を冷房がきいている体育館の大画面に映すというものである。このことによって児童の応援席にもテントを張ることができ、お客さんはグラウンドで直接観覧するほか、冷房のきいた校舎内でも観覧することができるようになった。

③平成26年度運動会　テーマ「全力×更喜歓」

この年は、真剣に練習し本気になって勝ち負けを競っていこうという考えのもと、「全力」をテーマに掲げて運動会が行われた。無我夢中で走る徒競走、声を張り上げながらの応援、どの種目からも児童の全力が感じられた。特に、学年全員で行う表現種目は、練習にも力が入り本校運動会の見どころの一つとなっている。テーマは、カンフー、龍、エイサー、ソーラン節など、中国と日本を感じられる部分も多い。大人数の迫力もあり、どの学年も児童の成長が感じられる発表であった。6年生の組体操では、目に涙を浮かべながら見ている保護者もいるほどである。

「更喜歓」は「もっと好きになろう」という意味で、26年度の学校テーマとして掲げたものである。運動会では、虹橋校の好きなところと上海の好きなところをみんなで出し合おうという企画が行われた。教員も児童も自分の感じた上海の良さを用紙に書き、それを運動会の日にあわせて掲示したのだ。多くの保護者もそれを目にし、交流しながら上海のよさを改めて感じることのできた企画であった。

(2) 特別活動の取り組みから

前述したように、体育部と特別活動部が協力しながら運動会をつくっていくが、特別活動部は運動会の他にも

年間を通して様々な活動をつくり出している。ここでは、中国人スタッフとの交流についての活動を一部紹介したい。

中国人スタッフはなくてはならない存在であり、我々職員は感謝しているということは前にも述べた。子どもたちにも中国人スタッフのことをもっとよく知ってほしいし、学校のためにたくさんの人たちが支えているということを分かってもらいたいという思いから、中国人スタッフと交流できるような活動を毎年行った。

児童が警備員のところにインタビューに行ったり、事務員の名前や好きな物をポスター形式で紹介したり、図書室のスタッフや用務員を招いて一緒に卓球をしたりと、いろいろな活動を中国人スタッフと一緒に行うことでお互いに良い影響が出たように感じる。

(3) 現地校交流

情勢不安定のため実施できない年もあったが、原則として毎年現地校交流を行っており、児童同士の交流を深めている。内容は、その年ごとに教員間の調整で決めているが、名刺交換やけん玉などの日本の遊びの紹介などが多い。ここでは、平成27年度の5年生の活動を紹介する。

5年生によるソーランの披露（現地校の皆さんは、半袖半ズボンはだしで踊る姿に驚いていた）

この年の5年生は、現地校の小学生を本校に招いて、五目並べや折り紙をするという活動を行った。活動の前までは「五目並べのルールや折り紙の折り方を上手く教えられるかな」と不安になっていた子が多かったが、いざ活動が始まってみると、相手校も五目並べをやったことがある子が多く、思っていたよりもスムーズに進めることができた。そして、強い。虹橋校の子は連戦連敗である。「すげー」「強いー」の声があちこちから聞こえ、「最初は手加減をして…」と考えていた子は痛い目を見ることになった。折り紙を教えるときに、最初は「何て言えばいいかわからない」と困っていた子も、知っている単語をつなげたりジェスチャーをしたりしながら、思っていることを伝えることができた様子である。「言葉では上手く言えないけど、意外に伝わる」ことを感じた後は和やかな時間を過ごすことができた。

最初は不安な気持ちが強かった子どもたちであるが、すぐに打ち解けて会が終わるころには「もっと一緒に遊びたい」という気持ちになったようだ。実際に触れ合うことは大切である。触れ合うことで「もっと知りたい、もっと仲良くなりたい」と強く感じたようである。

5．まとめ　―中国・上海のよさを感じて―

中国で生活し、海外で暮らす大変さを知るとともに、中国人の優しさにも直接触れてきた子どもたち。未来の日中関係を築いていくこの子どもたちには、メディアの一面的な報道にとらわれず、直接見たこと感じたことを大切にしながら成長していってほしい。帰国したときに、中国のよさを持ち帰り、日中の「虹のかけ橋」となることを願ってやまない。

6．終わりに

上海日本人学校は大規模校であるため、当然ながら教員数も多い。全国から派遣された教員は、それぞれに独自のスタイルを持っており、私もたくさんの刺激を受けた。運動会のような大きな行事を計画する過程では、様々な意見がぶつかり、時には衝突することもあるが、最後には全員が協力し、ひとつの行事をつくりあげることができた。虹橋校の先輩の先生方、同期の仲間、同僚、中国人スタッフ、みなさんに感謝である。